



はぐくみ

《学校教育目標》 ゆたかな心とたくましい体をもつ子どもの育成

立花北小 校長室だより

令和6年1月16日発行
No.9「29年前の1月17日午前5時46分」
発行者：校長 佐野 正信

29年前の1月17日に見たこと・感じたこと

阪神淡路大震災後に生まれた子どもたちはもちろん、震災後に採用された教員たち、震災後に転入して来られたご家族の皆さんも少なくありません。震災発生直後に書き記した日記等を引っ張りだして、少し当時の様子を振り返ってみたいと思います。

平成7年1月17日午前5時46分…その時

あの日、成人式を含む三連休明けの朝、私は、住んでいた神戸の自宅でその時をむかえました。わが家では、朝食の準備の真っ最中でした。突如、下から突き上げられるような衝撃に見舞われ、食卓で「マンマ！マンマ！」とはしゃいでいた当時1歳4か月の長男が座っていた椅子ごと跳ね上げられ、床へ落ちていくのが見えました。と、次の瞬間パチッ！っと火花が散るや否や真っ暗となり、あとは何が何だか、自分の体がいったいどうなっているのかさえも全くわからない状況が続きました。気づくと私は、長男がいた食卓テーブルの下あたりに無我夢中で転がり込み、そこへ妻も泣き叫びながら走り込んできました。暗闇の中、手探りで長男らしきものを探し出し、お腹の下に抱え込んだ時、2度目の激震が襲ってきました。いわゆる横揺れです。この衝撃はとてつもなく長く激しく感じられました。左右にいったい何メートル振られているのかというくらい激しい揺れでした。（大丈夫！落ち着いて！）と何度も自分に言い聞かせるようにつぶやきながらも、心の中では（倒れるなー！）と祈るような思いで必死に激震に耐えていました。今思うと、後にも先にも自宅マンションが倒れるかもしれない…なんて感じる経験は一度もありません。

2度目の激震がおさまった時、「今のいったい何？」「何かの大爆発？」…と妻がつぶやきました。私は、真っ暗な中、長男のほっぺを何度もたたきながら「大丈夫？声出してごらん」と、必死で反応を確かめましたが、長男はあまりの衝撃に放心状態だったのか、泣きも叫びもしませんでした。ただ、ドキドキ…という大きな鼓動から長男が無事に生きていることを感じました。

次の瞬間、ガタガタガタガタ…と、私たちがこれまで知っていた小さな揺れがやってきた時、私は初めて、さっきまでの衝撃が地震によるものであることを知ったのでした。あたりでは、けたたましく鳴り響く非常ベルの音、水道管が破裂して激しく流れ落ちる水の音、人々の泣き叫ぶ声…等々至る所から聞こえていました。ようやく顔が見えるくらいにあたりが明るくなった時、家族みんなで無事をよろこび合ったことを今でもはっきりと覚えています。

その瞬間を生き延びることの大切さ！

阪急も阪神もJRも線路が至る所で寸断され、勤め先の尼崎へは原付を使わざるを得ませんでした。その途中で見た光景は、今でも忘れることができません。ビルはへしゃげ、銀行がそこら中で転がっていました。教会は崩れ落ち、道路にできた大きな段差で車は立ち往生。脇道にそれでも倒れた家屋や電柱が道をふさいでいました。ここなら通れるはずだと思った踏切には貨物列車が脱線して静かに横たわっていました。「ここにおばあちゃんが埋まっとなや！」と叫ぶ人…。被害が大きすぎて警察も消防や救急も全く手がまわらず、人の手だけではどうもできない状況でした。原付を持ち上げて段差を越えながら、出勤初日は約3時間でようやく職場へ到着しました。当時、進路を直前にひかえた中学3年生を担任しており、働いている間は気も紛れましたが、いざ仕事が終わって、帰る時には相当な気合が必要でした。武庫川、夙川そして芦屋川…、川を一本ずつ渡る毎、灯り一つない真っ暗な世界が広がります。延々と続く車のテールランプの列は土ぼこりの中に消えていきます。常に聞こえるサイレンの音は耳について離れなくなりました。よく見ていないと、突然目の前に大きな段差や割れ目が現れるため、常に気を張っていたためか、不思議と寒さを感じませんでした。家族の元に戻っても温かいお風呂に入れる訳でなく、避難先の実家で家族三人と祖父・祖母と並んで眠るだけで、朝になれば、また寒い道のりを尼崎に向かって出発します。そんな日々が約3か月半続きました。あの時、どうして頑張れたのか…今思うと不思議です。間違いなく言えるのは、尼崎で待っている生徒たちがいて、神戸で待っている家族がいたということです。



近所のお年寄りの言葉が忘れられません。「食料も水も、戦争やないんやから待ったら必ずやって来る。大事なんは命だけ。命さえあれば、あとは何とかなる！」さすが戦争を経験しておられる方はすごいと思いました。まずは自分の命を守ることが、家族の心のエネルギーにもつながることを体験しました。また、いつ襲ってくるかわからない大震災。『その瞬間、たとえ大人がいなくても自分の命を自分で守れること。それ以上に大事なことはない！』というのが、阪神淡路大震災から私が学んだ一番の教訓です。今年も、間もなく1月17日がやって来ます。